



## 霞ヶ浦（その10） ～予科練の教育と日課～

厳しい選抜試験を突破した予科練合格者たちは、郷土の誇り、母校誉れでした。彼らは故郷で盛大な見送りを受け、土浦海軍航空隊の門をくぐりました。しかし到着後、入隊式までの間、さらに厳しい選抜が行われ、不合格者は泣く泣く帰郷させられました。こうした選抜試験に全て合格した者のみが、憧れの「七つボタン」の制服に身を固めて入隊式に臨みましたが、その喜びもつかの間、日夜を分かたぬ厳しい教育と訓練が待ち受けていました。

### 七つボタン

予科練の制服「七つボタン」は、制服の上着のボタンの数であることはもちろんです。予科練生が七つボタンの制服を着るようになったのは、1942（昭和17）年11月1日からです（予科練の15年の歴史の中で、七つボタンの制服は、わずか3年弱でした）。それまでは、ジョンベラという通常のセーラー（水兵）服を着用していた、さほど評判は高くありませんでした。そこで、全国の少年たちの憧れの的となるような制服にするのと同時に、予科練生の待遇改善のために、短ジャケット七つボタンに下士官型軍帽が制定されました。1943（昭和18）年6月、東宝映画「決戦の夜空へ」が封切られ、その主題歌「若鷲の歌」で「若い血潮の予科練の七つボタンは桜に似かき」と歌われると、一躍「七つボタン」が有名になり、予科練の代名詞となりました。この七つボタンは世界の七つの海を越えて大空を駆け巡る意味、月月火木金金という休日のない猛訓練の意味もあつたといえます。第二次世界大戦後の海上自衛隊でも自衛隊生徒や一般曹（下士官）候補生には、この予科練の制服に似た、短ジャケット七つボタンに下士官型軍帽の制服が定められています。

### 予科練の教育

予科練の教育の目的は「予科練習生に関する教育綱領第16条」によれば、「予科練習生ノ教育ハ徳性ヲ涵養シ体力ヲ錬成シ學術ヲ修得シモツテ将来航空特務士官トシテ軍務ヲ遂行スルニ必要ナル基礎ヲ確立スルコトヲ本旨トス」とあり、パイロットとしての専門教育以前の海軍航空の中堅幹部としての幅の広い

### 基礎教育でした。

その教育内容は、「予科」教育であり、海軍軍人としての基礎素養である精神力と体力の錬成を目的とする訓育科目、海軍の制度、通信、兵器の取り扱い等の一般的軍事知識・技能の習得をめざす軍事学と国語、英語、歴史、地理、数学、物理、化学等の修得を目的とする普通学がありました。

訓育科目には、勅諭奉読、講話等の精神教育、日常作業や、諸点検、諸作業等の勤務、そして体操、球技、長距離走、武道、短艇（カッター）、水泳、滑空（グライダー）訓練等の体育がありました。基礎体力を作るための体操として海軍体操が毎朝行われました。海軍体操には、第一体操と第二体操があり、第一体操はラジオ体操程度のもので誰でもやれる簡単なものですが、第二体操は一つの号令で左右別々の運動を同時にやるもので、反射神経と運動能力の向上をめざすものでした。

軍事学としては、航海術・航空術・砲術・水雷術・通信術・機関術・整備術等がありました。なかでも通信術が最も重要視され、予科練のカリキュラムの中で最も多くの時間が割かれていました。「手旗信号」、「発光信号」、「無線（モース信号）」など、飛行機搭乗員として絶対必要な各種通信手段の訓練は、徹底的に行われました。無線は送信も大切ですが、受信の方がさらに重要で、かつ難しかったため受信を重視した時間の配分がなされており、1分間で100字程度の送信、受信ができるように訓練が続けられました。

普通学のレベルはおおむね現在の高

等学校程度のものでしたが、数学、物理、化学は大学並の高いレベルの内容でした。数学では三角関数など飛行機で航法計算に使う重要なものが含まれており、物理は航空力学、流体力学、弾道学、気象学など、多岐にわたり、電気や重力など難しいものもありました。そのほか天文学、合金などの材料学、機械、発動機（エンジン）、銃器の構造を学ぶ授業もありました。

先生は、士官クラスの教官と下士官クラスの教員のほか、大尉か少佐待遇の高専の先生や兵学校の先生でしたが、授業は凄まじい詰め込み方式で、次々に試験が行われ、理解度が試されました。その日習ったことは、その日のうちに覚えるのが鉄則でしたから、夜の温習（自習）時間はもちろん、消灯後の手洗いの常夜灯の下で、大勢の予科練生が睡魔と闘いながら勉強に励んでいました。

予科練習生教程の教育では、航空機の操縦訓練を常に実施していたかのような印象を世間に与えています。上述したように基礎教育が中心で、実は全くといってよいほど行われていません。操縦訓練は予科練卒業後に、他の海軍航空隊で行われる本科としての「飛行練習生課程（飛練）」から開始されました。予科練習生課程においては、操縦組と偵察組（ナビゲーター・通信士など）パイロット以外の搭乗員に進路を分けるための飛行適性検査（飛適）の時に、教官と同乗し、指示により操縦を実施して適性を検査される時だけでした。

### 日課

予科練習生たちは、当初班員約20名で1個班を構成し、10個班で1分隊を

形成していました。下士官の班長が練習生の生活全般を指導し、士官の分隊長や分隊長が分隊を統率していました。航空隊内の起居動作、日課、授業などはすべて班または分隊単位で行われ、練習生は交代で班や分隊の当直や週番を務めていました。

予科練の一日は「総員起こし5分前」の号令から始まります。一日の行いはすべて「5分前精神」といって、日課の定刻通りに行動ができるように、5分前に準備しておくことが厳しく指導されていました。

朝6時(夏期の4月～9月は5時)、起床ラッパとともに「総員起こし」の号令が発せられると、全員一斉に吊り床(ハンモック)を飛び出し、吊り床を1分間程で片づけ、洗面を手早くすませて、数分後には各分隊ごとに整列して、駆け足で練兵場の朝礼台前に集合。ただちに当直練習生の指揮で全員が号令練習を行います、その声は霞ヶ浦に響き渡りました。6時15分から朝礼、軍艦旗掲揚、皇居遙拝、海軍体操、当直将校訓示などがある。無線・発光・手旗・旗旋信号などの信号送受信訓練も行われました。朝礼が終わると6時30分から朝の清掃。清掃は軍艦で言えば甲板洗い、躰教育の一環として重視され、なかでも甲板掃除という独特のものがありました。これは自分たちが毎日、使用しているテーブルをすべて甲板(居室の床)から通路に移動することからスタートします。オスタップ(洗濯桶)に水をいれ、その水と石鹸水を甲板にまき、ソープ(甲板用棒雑巾)で甲板を磨いていきます。教員の号令のもと、「ソープ用意」で12名が甲板の端か

ら端へと一列横隊で押していきます。足を鍛えるためには理想的方法ですが、端から端まで30メートルくらいはある床を、短距離走のスタート時のスタイルで尻を上げ、押しながら甲板を磨くこととなります。これを「押せ、押せ」の号令で何回もやらされるので、罰的の意味合いも含まれていましたが、兵舎や教室の床は鏡のように光っていました。

7時15分からの朝食は食事当番が炊事場から班員分の食事を受け取り、居室の食卓に配食して、班長とともに全員がそろって食事をしました。食事の後、8時からの朝温習は自習の時間で、8時50分、「課業(授業)整列5分前」の号令により、各分隊ごとに練兵場に整列した後、各教室に向かいました。午前中の授業(8時55分からは普通学や軍事学が中心で、昼食は12時から。午後の授業(12時55分からは主として体育、短艇、武道等が屋外で実施されました。船上生活は駆け足ですから、構内の移動も「休め」以外はすべて駆け足、歩くことは許されていませんでした。課業終了後、夕食までは柔道、剣道などの武道、球技、水泳などで体力気力の錬成を行い、土曜日の午後にも大掃除の後、武道、球技、水泳などを行っていました。

16時15分からの夕食も朝食、昼食と同様に居室の食卓に配食して、班長とともに食事をしました。夕食後の約1時間半が唯一の自由時間で、楽しい時間でもありました。予科練生はこの間に風呂(屋内プールにもなる大きなもので、ポイラー場からの蒸気で湯を沸かしていました)、洗濯、酒保(艦内や隊内にある売店。ここでは飲物、菓子、日用品等が

市価よりも割安で販売されていました。「酒」という文字が使われていますが、特別な場合を除いて、酒類が販売されることはありませんでした。の買物、故郷への手紙書きなど、ほんのわずかな休息の時を過ごしていました。18時10分から就寝準備の吊り床下ろしや清掃を行った後、約2時間の温習(自習)の時間となり、教室の机で全員が静かに予習復習を行いました。

夜の温習後、練習生全員が椅子に姿勢を正して坐り、目を閉じて、週番練習生が一語一語奉唱する海軍五省を聞いて一日を反省しました。その後、週番練習生以外は吊り床に入り、巡検に来た当直士官に週番練習生が人員の現況を報告、巡検終了ラッパと共に照明が消され、分刻みの、息つく暇もない一日が終わり、予科練生は眠りにつきました。



温習後、「海軍五省」をもとに一日を反省する練習生たち  
「写真集土浦」(市川彰編)より

※「海軍五省」とは、生徒がその日の行いを反省するために、自分に言い聞かせた、五つの問いかけのことです。海軍兵学校で1932(昭和7)年から、一日の最後に唱えられるようになり、その後、各地の予科練でも唱えられるようになりました。

一、「至誠に悖る勿かりしか」…何事も真心こめて行うことができたか

一、「言行に恥づる勿かりしか」…言葉や行動に恥ずかしい点はなかったか

一、「気力に欠くる勿かりしか」…気力ややる気は十分だったろうか

一、「努力に憾み勿かりしか」…できるかぎりの努力をしたかどうか

一、「不精に亘る勿かりしか」…つつい手を抜くようなことはなかったか

参考 中学45回戸張礼記氏

(甲飛14期2次)のお話

「阿見と予科練」そして人々のものがたり」

阿見町

(高21回 松井泰寿)

予科練平和記念館展示案内

桜花 ～人間爆弾～

平成27年3月1日(日)まで

開館時間 9時～17時 観覧料 500円 太平洋戦争中、日本海軍によって開発された特攻兵器「桜花」。茨城県に編成された「神雷部隊」の隊員たちとその戦いの記録

茨城県稲敷郡阿見町廻戸5の1